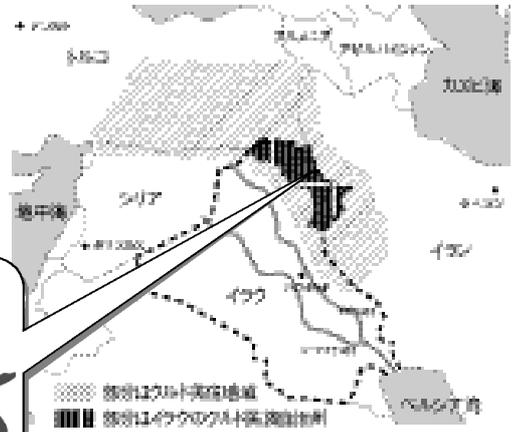


# 中井所長さんの1日

## ユニセフ人道援助活動の現場とユニセフ職員の仕事

イラク北部。ここにクルドの人びとが暮らすスーレマニアの地があります。これまでさまざまな紛争の舞台になってきたこの地で、ユニセフ連絡事務所の所長をつとめるのが、日本人ユニセフ職員の中井裕真さん。複雑に国際情勢の絡まりあう中でユニセフは中立の立場を保ちながら積極的な活動を続けています。今回は、中井さんの1日を追いながら、ユニセフ職員の仕事のようにとユニセフの人道援助活動の現場についてお伝えします。



写真：©UNICEF/Nakai ,©UNICEF/Suleimaniyah

### 経済制裁下のイラク

メソポタミア文明の発祥地にあるイラクは、95%がイスラム教徒の国です。その約8割をアラブ人が、15~20%をクルド民族が占めています。

1990年のイラクによるクウェート侵攻とそれに続く湾岸戦争から約10年、イラクへの経済制裁が続いています。制裁以前は中東一の発展を遂げ、ユニセフの活動を援助していたほどでしたが、今では激しいインフレと物資流入の制限、インフラやサービスの破綻から国民は苦しい生活を強いられています。湾岸戦争前の1987年、5歳未満児死亡率は1000人の出生に対し46人でしたが、昨年のユニセフの調査によるとこの数字は125人と2倍以上に跳ね上がっています。また栄養不良も深刻な数値を示しています。



### イラク国内のクルド民族自治区

イラクやトルコ、イランなどの国境にまたがる山岳地帯は古くから「クルディスタン」と呼ばれ、クルド民族の「故郷」とされています。クルド民族は全体で1500万人から3000万人ほどいると言われますが、これまで国際的に認められた独立主権国家を持つことはありませんでした。イラク国内ではクルド民族からの自治要求がしばしば内乱に発展してきました。湾岸戦争後、多国籍軍の保護のもと、イラク北部にクルド民族自治3州（アルビル・ドホーク・スーレマニア）がつくられましたが、それ以降もクルド民族同士の抗争やトルコ軍の越境攻撃、イラク軍の侵攻などが繰り返され、現在も情勢は流動的です。

これらの3州では、イラク国内から逃れてきたクルド避難民や、イランからの帰還難民などが集まっています。ここでユニセフは、さまざまな政治勢力、情勢に配慮しつつ、1991年から人道援助活動を続けています。



### イラクのユニセフ事務所

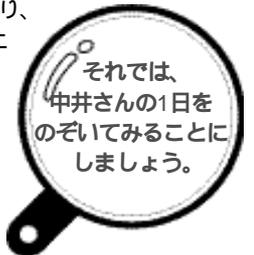
イラクには4つのユニセフ事務所があります。首都バグダッドにあるのが「本部」。イラク国内のユニセフの活動全体を統括するほか、イラク南部や中部でのユニセフの活動を担当します。



バグダッドから北へ約500キロ（東京と大阪位の距離）クルド民族の街のひとつ、アルビルにある事務所は、アルビル州でのユニセフの活動を担当するほか、クルド民族自治3州のユニセフ活動を統括する「地域本部」という役割を持っています。

そして、アルビルから西と東にそれぞれ250キロ程離れた場所にある街、ドホークとスーレマニアに、連絡事務所があります。スーレマニア連絡事務所は、外国人スタッフ3人の他、保健・栄養・教育・飲料水と衛生の各分野の事業関係専門スタッフや、物流、無線通信、会計・経理等のスタッフなど、約50人の職員がおり、人口約150万のスーレマニア州でのユニセフ活動を担当しています。

今回使用している地名等の名称表記は、中井さんからの原稿をもとにしています。





# 中井所長さんの1日

07:00

起床。あまり寝られなかった。電気も来ないから扇風機もまわせなかった。お手伝いさんに発電機を回してもらい、衛星テレビのニュースを見ながら朝食。



住宅街の一軒家。公共の電氣は設備の老朽化から一日5、0時間しか来ない。安全上の理由から夜間さんと町警 お手伝いさんを雇っているが、もろもろ男性。比較的劇的なスーレマニアでも、非イスラム男性とイスラム女性が一緒にいることは御法度。

08:15

イラクでは9つの国連機関がそれぞれの分野で人道援助活動をしている。全体を調整するのが「国連イラク人道援助調整官事務所」。

「国連イラク人道援助調整官スーレマニア事務所」でのミーティングへ。昨日午後、国連職員が住む地域で車に仕掛けられた爆弾が爆発。住民数名が負傷。地元の政治結みの威嚇行為で、国連職員を狙ったものではないとの観測。緊急時の連絡方法等を確認。



09:45

募金などの資金を「お福がらして」活動しているユニセフの事業は、計画に基づいて実施される。だから、非常に個人的な支援をお断りされてもよほどのことかない限り「例外」として扱えない。でも、こういう場面は結構多く、まことに辛い。

受付から「子どもを連れだ女性が座り込んで」と電話。病氣治療のために金銭的支援をしてほしいとのこと。ユニセフは個人への金銭的援助はできない、と丁寧にお願いを取りを願う。



ユニセフの支援で改装されたスーレマニア市内の保健所の開所式へ。車の中でネクタイを締める。

09:55

10:20



開所式。テープカット、スピーチ。内部をひと回り。コーラと菓子(落雁みたいを)片手に、地元高官と次のポリオ予防接種キャンペーンの日取りなどを話す。



事務所。臨時運転手採用の面接に備え、応募者の書類に目を通す。

12:50



ユニセフの職員採用は、外国人職も現地採用も「能力主義」。でも、特に政治的に微妙な場所での現地職員採用には、いろいろ政治的圧力がかかってくる。相手の気分を察すると、思わぬ場面でもユニセフの仕事が邪魔しかねない。「既9方」にも気を配らなひと一。

地元高官から電話。「優秀な女性がいるのでユニセフで仕事を世話してほしい」。職員募集は必要に応じて地元新聞に広告を掲載している、などと説明し、その場をしのごく。

12:55

運転手採用面接と運転技能試験。13:10 スタッフと総合評価をまとめる。



7:00

07:45

近所に住む同僚を車で拾いながら出勤。



ユニセフの車は運転手さんが運転するものなのだが、万が一のために急停車等を備えた4輪駆動車を住居に待機させている。というわけで、朝晩は私が運転手。

07:55

出勤。e-mailとFAXをチェック…。うっ! e-mailがダウンしている! 電話も使えない。無線でアルビル事務所のコンピューター専門スタッフに指示を請う。



8:00

9:00

09:10

事務所。昨夜に続き今夜行われる「水不足問題」に関する現地政治家との折衝について、飲料水・衛生担当スタッフらとミーティング。



09:30

アルビル事務所のユニセフ事業総調整官(私の上司)に衛星電話。今夜の折衝で私が示すべきユニセフとしての態度を確認。先ほどの「爆弾騒ぎ」についても報告。

ユニセフは、地域の行政機関などと協力して活動の計画や予算を立て、それに応じて技術や資金を提供する。そのためには、「政策」や「予算」を定める「政治家」レベルの人達との折衝が大切。スーレマニアでのユニセフ総調整官としての私の仕事は、かなりの部分がその「折衝」。



10:00

11:00

11:15 事務所。障害児ケアに関するNGOとの共同事業の申請書を仕上げる。

12:00

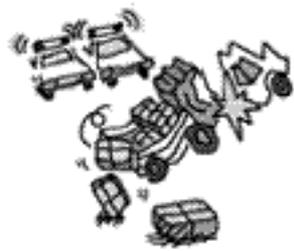
12:00 同僚と昼食。国連外国人スタッフが食事できる場所は数ヶ所。メニューも決まっている。炒めご飯に焼き鳥か羊の肉、トマトベースの野菜スープ。茹ですぎスパゲッティ、「それほほい」ハンバーガー。しょっぱくて食べられない「中華料理」等々。



13:00

レストランでは味わえないトルコ風の食事は、実はもっとパワエティに富んでいる。地元の家でいるいるな料理を「勝手に」食べたけど、傑作だったのは羊の頭。結構美味い(おいしい)。冬季特別限定料理。作るのも大変らしいが食べるのも大変だった。





14:30

物流・物資調達担当スタッフから突然の報告。「ユニセフの物資を搬送中のトラックが近郊で事故。数名が病院に運ばれ、運転手は警察に連行。」支援物資の現状回復のため、彼に事故現場へ行ってもらい、私は保健担当スタッフと病院、警察署へ。

14:00

14:55 病院。けが人は軽い打撲程度ですぐに退院できるとの話。状況は無線連絡。

15:00

15:15 警察署。刑事上問題ないことが確認されるまで運転手は警察にお泊まりとの話。

事務所。物資に損失や損害はなかったとの報告に、ひとまず「ホッ」、バグダッドとアルヒルの事務所へ事故報告。

16:00

16:00

16:15 机に山積みの書類(決裁に私のサインが必要)と復旧したe-mail断片つ編から片づける。



17:00

18:00

19:00

18:30 「水不足問題」に関する政治家との折衝に向かう。



20:00

21:00

21:30 事務所。今夜の折衝報告書を作り、上司にe-mail。

22:00

22:30 帰宅。15分でスバゲッティを作り、テレビを見ながらいつものごとく遅い夕食、シャワー。

23:00

24:00

24:40 スタッフを自宅へ送り、再度帰宅。そのままベッドへ。

ZZZZZZZZZZ

17:20 テレビからのインタビュー。「子どもの権利条約」を解説。



19:00

折衝開始。昨夜に続き熱い攻防戦(?)。政治家達は事業上の必要を考えるよりも、ユニセフの資金をただ欲しているかのごとく、かなり強行に資材や機材の購入を迫ってくる。当方「事業上の必然性」の立場を譲らず、2時間の会議はお開き。



23:30 就寝...と、その時事務所の複警から緊急発電用の発電機が故障した、と無線連絡。修理ができるスタッフを車で拾って事務所へ。幸い大した故障ではなくすぐに回復。



## どうしてユニセフ職員になったのですか？ これまでのプロフィールを。

テレビのせいです...。「24時間テレビ」という番組を毎年欠かさず見ていて。そんな間に「洗脳」されてしまったかな。強烈だったのは、1984~85年のエチオピア飢饉の映像。その時高校生でしたが、「これしかない」と思い、どうしたら支援の現場に行けるのか考えました。

国連なら「ちゃんと給料をいただきながら」仕事ができると知り、でも、大卒ですぐ国連職員にはなれないということもわかったので、大学を出てからは、きっかけとなった「24時間テレビ」で3年。エチオピアやカンボジアでの海外援助事業を担当しました。それから、国連ボランティアとして、ボスニアや南アフリカで働いた後、イギリスの大学院で農村開発学や難民学を修め、外務省の「国連アソシエイト・エキスパート」試験を受けました。これは「国連の正規職員を目指す若者を一定期間国連に派遣する」制度。お陰様で合格し、ユニセフ・ミャンマー事務所等を経てイラクへ来て約2年半になります。

## この仕事のやりがいとは？

いろいろな国籍の人達と、国籍や文化的背景を超えて一緒に仕事ができること。ユニセフ・イラクには約25人の外国人職員がいますが、国籍はバラバラ。そんな中で仕事ができるってあまりないでしょう。それから、世界中のなかなか行けないところにも行ける。これって「やりがい」というより「魅力」ですね。

子どもの健康や教育の環境を整えるお手伝いが仕事ですから、そういう「やりがい」はあります。実際にユニセフの活動が現地に根付いて、住民が自分の力で工夫して生活をよくしている姿を見ると、「やりがい」と同時に「敬服」を感じることが多いです。ただ、実際にそういう現場や子ども達と直面する機会は意外と少ないので、定期的に本当の「最前線」に行っておくことで「やりがい」を実感させてやらないと感覚が鈍ってきますね。

## 危険な地域で働くのは怖くないですか？

今のところ大丈夫です、とおきましよう。ボスニアではいろいろな目に遭いました。援助物資を運ぶトラックを誘導中、私の車のすぐ後ろに迫

撃弾が落ちたり、銃を突きつけられてカージャックされたり、狙撃兵がごそごそいる街の真ん中を防弾チョッキとヘルメットをつけて走り抜けたり...

イラクの状況は比較的安定しています。時々ある爆弾騒ぎも、背景がおおよそ察しがつくので、身の危険を感じることはあまりありません。

「危険な勤務地」とされているところでは、常時無線を携帯して定期的に相互の位置や安全を確認したり、「危険度」の高い地域への接近や夜間の外出を制限したり、などの安全策が取られています。個人的には「安心感」があるんですよ。でも同僚の中には最初は平気でも徐々に恐怖心が積み重なり、耐えきれなくなった人も何人か見えています。どこまで対応できるかは個人差があるんでしょうね。

## 日本の子どもたちへメッセージを

私が仕事した国は世界中に散らばっていますが、出会った人はみな「日本は素晴らしい」と言ってくれるんです。「何が？」ときくと「ソニー！トヨタ！日産！東芝！...」だって。

「なんだ」って思わないください。彼らは「完璧な製品」を作り出した日本人や日本の社会に関心があり、尊敬の念を持っているんですね。私が「日本人らしからぬ」失敗をすると、「日本人のくせに」と言われてしまうほど。

でも、彼らが触れる「日本」は、やっぱりテレビや車。私が「生まれて初めて見た日本人」といわれることもしばしば。「これでいいんだろうか？」とも思ってしまいます。例えば、ユニセフや国連での日本人職員の少なさ。日本の政府開発援助(ODA)は、今や世界のトップクラス。ユニセフへの日本の支援(国と民間)も同じくらいの重要さを占めています。ところが約5600人のユニセフ職員のうち日本人はたった40人弱。私のいるようなところで、日本の姿は「物」のかたちでしか見えてきません。(国連の車はほとんど日本車、コンピューターもコピー機も日本製)ちょっとえらそうなことを言わせてもらえば、私たちの中に「世界の中の日本」という意識はどれくらいあるのだろうか？と思います。食品を含め資源の多くを輸入に頼っている一方で、日本の経済が「くしゃみ」をすれば、周辺国は「かぜをひく」といわれるほど、影響力を持っていますよね。

みなさんひとりひとりがそんな日本の将来の能取り役だ、ということをお忘れなく。

